

小・中・高等学校における学びの接続性・ 系統性の構築を目指して

田中宏幸

一 はじめに

学習指導要領が改訂され、小学校（平成23年度から）、中学校（平成24年度から）に引き続き、高等学校でも、本年度（平成25年度）から学年進行で新しい学習指導要領準拠の教科書を用いた学習指導が始められることになった。こうした状況に対応するため、本会では、平成23年度より三年間にわたって「新しい学習指導要領と国語科授業」を柱として研究協議を進め、「言語活動の充実をどう図るか」、「習得・活用・探究をどう扱うか」に引き続き、本年度（平成25年度）は、「伝統的な言語文化をどう扱うか」をサブテーマに据えることにした。

「伝統的な言語文化」は、新しい指導要領の三領域（話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと）を支える「事項」の名称に用いられているフレーズであり、初等・中等教育段階を一貫するものとなっている。「伝統的な言語文化」をどのようなものとして捉えて

いけばよいか。従来の中学校・高等学校での「古典」とどのような関係にあると考えればよいか。さらに、実際にどのような授業づくりを行っていけばよいか。こうした問題を解明することが喫緊の課題となっている。

こうした問題意識の下、今回は、学習指導要領改訂前から「伝統的な言語文化を尊重する教育」に先進的に取り組んだ宗像郁子氏（東広島市立八本松小学校主幹教諭）、「小・中の学びをつなぐ授業づくり」を目指し実証的に授業開発を進めている浜岡恵子氏（広島大学附属東雲中学校教諭）をゲストとして迎え、さらに「考える授業づくり」に意欲を燃やす岡田真由氏（広島県立広島皆実高等学校教諭・本会会員）が加わることよって、小・中・高の接続性・系統性を視野に入れた協議を進めることとした。

以下、三氏の提案の特徴と意義を整理し、今後の実践への展望を明らかにしていきたい。

二 実践報告・提案の特徴

1 宗像郁子氏の実践提案

宗像氏の前任校・東広島市立原小学校では、平成19年度から東広島市伝統文化教育推進校の指定を受け、続いて平成20・21年度には国立教育政策研究所教育課程研究センターの「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」指定校として、先進的な授業開発を進めてきた。授業構想を立てるに当たっては、「育てたい力」の構造を明確化し、「伝統的な言語文化に関する学習系統表」を作成し、さらに「教材の特質に応じた授業の流れ」を整理するなど、理論的な研究も意欲的に進められた。平成20・21年度には、各学年で二〜三単元が開発されたが、その中から、本研究協議会では、第五学年における単元「なるほど！昔のお話から（名人編）」と単元「漢詩の世界にふれオリジナル五言絶句を作ろう！」を中心に、実践内容とその成果が報告された。

単元「なるほど！昔のお話から（名人編）」は、徒然草一〇九段「高名の木登り」と一一〇段「双六の上手と言ひし人に」を教材として、「登場人物や場面の描写をとらえ、自分の考えをまとめる」ことや「昔の人のものの考え方や感じ方を知る」ことを目標として組まれた学習である。「音読」を重視し、まず全体像を把握してから、自分の考えを持ち、それを「新聞」にまとめさせた点に特徴がある。

新聞づくりに際しても、児童の負担感を軽減するために、一時間ごとの学習記録がそのまま新聞紙面として生かせるように工夫され

ている。第一次、第二次（各二時間）においては、「兼好がたずねたこと」「名人の答え」「自分が考えた意味」「感想」の四項目について全体の三分の一の大きさの用紙に書かせておき、第三次（一時間）では、二つの段を比べて考えたことを書かせ、さらに「他の名人のお話」を取材させている。そして、全五時間の授業が終了した時点で、その三枚を貼り合わせると自動的に新聞ができあがるという仕組みである。

単元「漢詩の世界にふれオリジナル五言絶句を作ろう！」では、身近な漢文（和語と漢語、格言・四字熟語）を探すことから始め、「春暁（孟浩然）」と「絶句」（杜甫）を読んだ後、五言絶句の創作にチャレンジさせている。中学生でも困難な学習課題だと思われるが、「絶句」をベースとして、自分の体験をもとに情景と心情の対比に留意しながら書き上げたオリジナル漢詩は、とても小学生が書いたものとは思えない出来栄えとなっている。

古典を理解するだけでなく、こうした指導上の工夫によって、伝統的な言語文化に対する親しみが深まり、言葉や文に着目して読む力が高まっているのがよくわかる。読む力のみならず、表現する力も高められているのが、この実践のすぐれた点であると言える。

2 浜岡恵子氏の実践提案

浜岡氏は、「生徒自身が主体的に関わる授業づくり」を心がけ、小・中の学びをつなぎながら、「伝統的な言語文化への親しみ」を実感できるように、意欲的に授業開発に取り組んできた。

「伝統的な言語文化における小・中9年間の学びのつながりモデ

ル」を構想するに当たっては、全体を三期に分けている。第Ⅰ期「出会い楽しむ」段階（小1〜4）では、「自由に想像する」ことを大事にしていく。第Ⅱ期「興味・関心を広げる」段階（小5〜中1）では、「豊かに想像する」（根拠をもって推論・想像する）ことを重視する。そして、第Ⅲ期「ふれる機会を自ら求める」段階（中2・3）では、「深く想像する」ことを目指していくのである。児童・生徒の心理に即して言えば、「こんながあるんだ」↓「おもしろいな」↓「もっと読みたい」↓「くわしく読みたい」というふうにはレベルアップしていくことになる。

報告された授業実践は、「百人一首」を鑑賞する学習（配当時間全六時間）である。和歌の「情」（作者の心情）と「景」（和歌の風景）を深く読み取らせるには、「歌日記を書く」という言語活動を取り入れることが効果的なのではないかという授業仮説を立てている。そして、それを検証するために、「歌日記」をもとに交流させる「処遇群」と「ワークシート」をもとに交流させる「対照群」に分け、それぞれに鑑賞文を書かせたとき、より深く共感的に鑑賞することができるようになるのはどちらかを確かめていくのである。

その結果、評価Aに該当する生徒は、処遇群が対照群のほぼ倍に相当する人数となった。「歌日記」を書くという学習が、作者に同化することを促し、作者の心情に即して共感的に鑑賞するを姿勢を導き出したのであろう。一方、「ワークシート」によって学習を進めた対照群の生徒たちは、読者として客観的な立場を維持し、全体を解説するような書き方をしていたものと思われる。

また、この実践において見落としてならないのは、「紀貫之の歌日

記」と称して、「教師が創作したモデル文」を提示したことである。このように作品モデルや文章展開例を示すと、生徒の自由な発想を妨げるのではないかと批判されることがあるが、その批判は当たってはいない。慣れない学習に取り組む生徒にとっては、モデルがあることよって学習に見通しが持てるようになり、表現意欲を高めていくのである。モデルによつて着眼点や基本的な展開の仕方を習得させたいうえで、他の教材で活用できるようにしていくことが大事なのだと思えるべきであらう。

なお、和歌の鑑賞に当たっては、①分析の対象を「詞書」の添えられた歌に絞り込んでいること、②分析の観点を「作者による語の選択理由」と「掛詞」に絞り込んでいること、③「詞書」を手がかりにして場面を具体的に捉えさせていること、にも注目しておきたい。表現を手がかりに作者の置かれた状況を正確に捉えさせたいので、観点を絞って作品分析させたことが、作品を深く読むことにつながっていったのである。

3 岡田真由氏の実践提案

岡田氏の問題意識は、「中学校から高校への移行期の差を埋めること」と「大学入試問題に対応できる学力をつけていくこと」とをいかに両立させていくかというところにある。生徒が「古典の学習は楽しい」と感じつつ、「古典を読む能力」を身に付けていく授業の開発を志しているのである。

そのために、岡田氏は、「文脈による語彙獲得の場」と「思考の場」の設定に力を注ぐ。例えば、「天の羽衣」（『竹取物語』配当時

間全六時間)であれば、「今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける」の「あはれ」の訳し方について考えさせていく。「しみじみ」という辞書的な意味に置き換えて満足するのではなく、これまで確かめてきた作品の全体構造や姫と帝の関係性に注目させながら、ペアワークなどの作業を通じて、文脈に即した最も適切な訳を考えさせていくのである。

また、「思考の深まり」を促すために、「竹取物語」では人間世界を肯定的に評価しているのに対して「自分自身は人間世界を『きたなき所』と考えるかどうか」について、意見文を書かせている。語りの主体が作品で提示している問題領域(時代の葛藤や、語りの主体の思惟)を共有し、現在を生きる者としてその問いに答えていくことを求めるのである。ここでも学習過程にペアワークと発表を取り入れ、「級友と対話」することによって考えを熟成させてから書かせていくところに特徴がある。

これまで、進学希望者の多い高等学校においては、古典の授業は知識の習得に重点が置かれ、訓詁注釈に終始することが多かった。これに対し、岡田氏は、各時間に一題は作品の「読み」に関わる問題を提示し、ペアワークと発表によって、「作品と対話」するように導いていったのである。

三 協議の実際

上記の提案を受けて、次の五点を協議の柱として協議を進めた。

1、伝統的言語文化の授業に対する問題意識の共有

2、各校種で目指すべき到達レベル

3、各校種における教材の質と配置

4、言語活動の意義

5、実践上の課題解決のための手立て

参加者から出された主な質問や意見は、以下のとおりであった。右の五つの柱に沿って議論されたわけではないが、いずれも授業の本質に関わるものであった。

(1) 文化の連続性をいかに実感させるか

協議の冒頭に出されたのは、「生徒は、古典作品を縁遠いものとして受け取りがちである。古典は、私たちの中に流れ込んできているということをどういう形で実感させているかを明らかにしてほしい。」という要望である。

この要望に対し、宗像氏は、「『高名の木登り』などは小学生にとっても身近なエピソードとして理解できるものであり、『古典は人の生き方に役立つ』という受けとめ方をしている。適切な教材の選択が重要であろう」と答えた。

浜岡氏は、「古語の障壁は確かにあるが、共通点と相違点に気づかせたり、歌日記を書かせることを通して同化体験をさせたりすることを通して、古典を自分自身に関わるものという意識で客観的に見ることができるようになるのではないか」という考えを示した。

岡田氏は、「毎時間の問いの設定が重要であり、作品が投げかけるテーマについて考えさせることによって、古典の世界を自分の問題として受けとめることが出来るようになるのではないか」と自分の実践を総括した。

伝統的な言語文化の授業改善の鍵として「教材の選択」「課題の設定」「表現活動の導入」の三点が浮き彫りにされたのである。

(2) 学習者はこの授業を通して何に出会ったのか

続けて、話題となったのは、「この実践を通して学習者は何に出会ったのか」という問題である。各授業によって到達しえたものは何であったのだろうか。

宗像氏は、「徒然草」の授業では、昔の人の教えは自分を豊かにしてくれるものであるということに気付き、『漢詩』の授業では、漢字の世界の奥深さに気づいてくれた」と実践成果をまとめた。

浜岡氏は、「口語訳ができればよいという授業ではなく、『情』と『景』の関わりに着目し、日記という形で作者に寄り添うことことで、作者の思いに迫ることができた」と「作者との対話」が成立したことを明らかにした。

岡田氏は、「生徒たちは、天上界と人間界を『死』と『もの思い』の有無に注目して、現代という時代や他者との関わりや人生の意味について考えを深めていった。このように自分の認識を言語化し、言葉を獲得したことが大きな成果である」と答えていた。

各実践に総じて言えることは、学習者たちは意欲的に学習にとりくみ、「伝統的な言語文化」の魅力や価値に気付き、現代との共通点と相違点を感じながら、語り手（作者）の生きた時代の問題に思いを馳せ、最終的には現代にも繋がる問題として受けとめていたという点である。学習者の発達段階に応じて、レベルの差はあるが、ここにそれぞれの実践に共通したもの（系統性）を見出すことができるであろう。

(3) 思考を深めるための論題の立て方について

議論をさせることによって生徒の思考が深まることは間違いないが、論題の設定いかんで、思考の深さは異なってくる。このことに關して、「岡田氏の「人間界は、『きたなき所』か」という二者択一式の論題設定は適切か」という問いがフロアから出された。

質問者が懸念するのは、次のようなことである。——物語に登場する天上界の人々は「人間界」を「きたなき所」と評価しているが、かぐや姫は月に帰りがたらない。このプロットに着目すれば、物語の語り手は「人間界」を必ずしも「きたなき所」とは考えていないことになる。このように解釈した上であっても、「現代社会を『きたなき所』と評価するか否か」という二者択一式の問題に直結させていくと、この作品構造を踏まえないうままに上滑りの議論をすることになるのではないか。また、前提としている解釈そのものを議論しなくなってしまうのではないか。

これに対し、生徒指導上の課題が頻発する高等学校に勤務する参加者からは、「このように二者択一式に絞り込み、論点を明確にすることで考えを深めさせることができる」という反論も出された。同じ二者択一式であっても、「AかBか」という論題ではなく、「Aか『非A』か」という論題を立てた方が、判断基準を整理しやすく、議論も深まるという指摘である。議論に慣れない生徒の場合は、簡明な問いにして議論を重ねるうちに、「A」以外の解釈や対案が弁証法的に生まれてくる可能性があるということであろう。

課題設定の在り方については、いずれかに限定してしまうわけにはいかない。学習者の状況、到達目標の違い、教材の質などを総合

的に判断していくことが必要となる。今後の課題としたい。

(4) 学びの系統性・接続性について

学習指導要領解説によれば、小・中学校の段階では、「知ること」「親しむこと」に重点が置かれている。一方、高等学校では「考察する」ことに重点が置かれることになっている。ここにはある種の「隔たり」がある。「知る」「親しむ」から「考察する」に至るための段階をどう考えていくかという、学びの接続性の問題が最後に提起された。

時間が不足し、このことについて十分に協議することはできなかったが、高等学校「古典A」の言語活動例に見られるように、「音読・朗読」等によって「慣れ・親しむ段階」、伝統と文化に関する表現を集めたり調べたりすることによって「知る段階」、作品を読み比べて人物・情景・心情などについて「考える段階」という三つの段階が想定できる。この流れを、小・中学校でも意識し、螺旋状式にレベルを上げていくことが必要であろう。三名の提案者からも、「読んでよかった、楽しかった」と思える単元開発をしながら、言葉にこだわり読みを深めていくなど、つけたい力をしっかりと見据えて授業づくりをしていきたいという感想が述べられた。

四 協議のまとめ

以上の協議を通して明らかになった今後の実践研究への課題と展望は、三点にまとめられよう。

第一は、教材の開発と選択である。今回は、「徒然草」「百人一首」

「竹取物語」という、言わば定番教材化している作品が取り上げられた。教材内容としても児童・生徒の発達段階に適したものであり、「伝統的な言語文化」の世界と現代との繋がりを実感させるのにふさわしいものであった。この教材選択の確かさが、それぞれの授業の質の高さの基盤になっていると言える。このようにこれまで評価の高かった作品を読み直し、児童・生徒の発達段階に応じた教材の選択・組み合わせ・配列に工夫を凝らしていくことが、小・中・高の接続性・系統性を明らかにしていくことに繋がるであろう。

と同時に、これからは新たな教材開発にも取り組んでいきたい。「伝統的な言語文化」の裾野の広さを考えると、それぞれの困難な時代を懸命に生きた人々の問題意識や思いに迫ることのできる教材はたくさん残されているはずである。教科書に採録されているからという消極的な理由ではなく、新教材の開発や関連教材の発掘を求めて教師自身が積極的に数多くの古典を読み込んでいくことが、生徒たちに「伝統的な言語文化」との新鮮な出会いを経験させることに繋がるであろう。

第二は、言語活動の充実である。本協議会で提案された実践では、「新聞づくり」「漢詩の創作（リライト）」「歌日記」「ペアワーク」「発表」など、多様な言語活動が取り入れられていた。いずれも児童・生徒が「表現者」の側に立つものであり、この活動を通して、それぞれの時代を生きた人々の思いを理解すると共に、現代に生きる自分自身を見つめ直すようになったのである。従来の訓詁注釈式知識伝授中心の授業（基礎からの積み上げ型の授業）から脱皮していくには、児童・生徒が「表現者」の側に立つような学習活動を多

様に仕組んでいくことが求められるであろう。

ただし、その際に、「伝統的言語文化」を理解するための基礎知識を疎かにしてはならないことは言うまでもない。言語活動を柱としながら図っていきながら、基礎知識の必要性を実感させ、「基礎に降りていく」学びの過程を作り上げていくことが問題解決の鍵となるであろう。

第三は、課題の設定である。今回の宗像実践では、「なるほど！昔のお話から新聞」というネーミングが物語るように、「現代の生活にも関係している名人の教えを探そう」という課題が、児童の「新しいことを知りたい」という知的好奇心を発揚させ、学ぶ意欲に繋がっていた。浜岡実践では、「日記という文体で、作者に同化して書く」という課題が、物語を創作する気分につながり、学びの意欲を高めていった。更に岡田実践では、「物思ひ」を表す語（「あはれ」や「かなし」）を最も適切な現代語に言い換える学習課題や、「人間社会は『きたなき所』か」というシンプルな問いのもとで議論するという学習課題が、自分の問題として考えるところという姿勢を生み出していった。このように、学ぶ意欲を喚起するとともに、教材をより一層深く読むことに繋がる課題の開発が、授業の質の深淺を決定づけていくのである。

この課題の具体的な設定方法は、教材ごとに異なってくるし、学習者の発達段階や学習状況によって異なってくる。ここに、国語科教育研究の奥深さがあると言えよう。この奥深さは、個々人の研鑽意欲だけはどうも極められるものではない。それぞれの実践を持ち寄り、協議し合うことによって、教材分析の質を高めるとともに、

多様な指導法やアイデアを身に付け、常に新鮮な気持ちで学習者に最も適した課題を設定できるようになりたいものである。

※協議会における各氏の発言記録は、稿者が要約したものである。文責は稿者にある。ご了承いただきたい。